津田梅子の生き方（2）～父・仙～

津田 仙
【提供】津田塾大学津田梅子資料室

梅子の父・仙は、幕府が購入契約していた軍艦の催促、大砲小銃の輸入、製鉄関係書籍の購入等を目的とした使節団の一員として慶応３(1867)年１月にアメリカへと渡り、およそ半年後に帰国しました。

帰国してからの仙は、幕府から「通弁・翻訳御用、英学教授方」として新潟奉行所への転勤を命じられましたが、大政奉還、王政復古の大号令、戊辰戦争と立て続けに大事件が起こったため、非常に不安定な状況で新潟へ向かうことになりました。その後、幕府軍として戦闘にも参加した仙でしたが、幕府の敗走とともに自身の役人としての立場も失くすと、最終的には学友や知人の助けで長崎までたどり着き、しばらく身を潜めていました。この頃仙が妻に送った手紙には、「梅子に朝夕に時間を決めて読み・書きの練習をさせるように」と記されています。

明治時代を迎えて「田安徳川家」の家臣という地位を失った仙は、1869（明治２）年、築地の外国人居留地にあった外国人専用のホテル「築地ホテル館」の理事として働くようになりました。このホテルは、貿易所も兼ねていていました。このホテルの厨房では、外国人に出す食事のうち、野菜については全て缶詰のものを使っていたので、食事の評判はかなり悪いものでした。西洋の野菜を栽培している農家が日本にいなかったからです。仙は、ホテルの客の好みに合わせるべく、西洋野菜の栽培を思い立ち、少しずつ取組を始めました。仙のこの試みは、このホテルを辞めた後にも続いていきます。仙は、1869（明治２）年に設立された官庁の一つである開拓使に勤務するようになると、開拓使に勤めながら、アスパラガスや西洋リンゴ、オランダイチゴなどを日本に移入しようと西洋野菜や果物の栽培に本格的に取り組むようになり、農学者の道を歩むことになりました。

津田仙の名が残る記念碑【街路樹の記念碑】

皇居大手門近くの歩道に立つ記念碑に、仙の名前が記されています。
仙が明治６年のウィーン万国博覧会の際に種子を持ち帰り育成したもので、明治８年に東京市内に初めて外来種による街路樹を植えたことを記念して建てられました。

仙の上司、開拓次官の黒田清隆は、1871（明治４）年１月から開拓事業調査のため欧米視察を行っていました。開拓事業の顧問についてもらうために、アメリカの前農務局長であるホーレンス・ケプロンを連れて日本に帰ってきました。黒田は、開拓事業視察から帰国後、教育の促進に関する意見書を政府に提出しており、その中で女子教育の必要性について「開拓には人材が必要であり、人材の育成には教育が不可欠である。そして優秀な人材を育てるには教養ある母親が必要となる。良い母親となる人材を育成するため女学校の整備と、幼い女子を欧米留学で学ばせる必要がある」と唱えていました。

当時、右大臣岩倉具視は、特命全権大使として欧米に岩倉使節団を率いることになっていました。この使節団は、条約締盟国の元首の訪問、不平等条約改正の予備交渉、欧米諸国の視察などが主な目的でした。黒田は、この使節団とともに女子を海外留学させるという意見を提案し、岩倉がこれに賛同して女子留学生派遣事業が動き出しました。しかし、第一回目の募集では誰も応募してこなかったので、再度急いで募集をすることになりました。

仙は、ホーレンス・ケプロンの歓迎会に出席する機会があったため、女子留学生募集の情報を知ることができました。話を聞いた仙は、ぜひ娘に応募させようと考え、まず長女の琴子に話を持ちかけましたが、琴子は留学を望みませんでした。しかしより幼い梅子の方が留学への意志を見せたため、仙は梅子を女子留学生の一員としてアメリカへ送り出すことに決めました。